

03

西尾佳織  
Kaori NISHIO

## 言葉からもれるもの

### Production manager って、 つまり何をする人のこと??

2015年の5月から7月の三ヶ月間、RACのクラスを受講した。RACというのはReal Artist Conversationsの略で、セゾン文化財団がブリティッシュ・カウンシルと提携し、アーティストを対象に提供している英会話講座だ。

私の英語のレベルがどのくらいかという、旅行で一人あちこち見て回る程度なら困ることはそんなにないが、日常会話以上になると分からないことがちょくちょく出てくるくらい。2013年にルーマニアのシビウ国際演劇祭にボランティアスタッフとして参加したのだけれど、そのときは日本のカンパニーアテンド担当になり、英語のほぼ出来ないカンパニーであれば多少お役に立てる場面もあったものの、例えば東京芸術劇場の“The Bee”チームが来たときはみなさん当然私より英語が堪能で役立てる場面はまるでなく、終始ニコニコしながらちゃんりしていました、というくらい。

受講初日、ツイッターにこんなことを書いていた。

5/17

productionという単語を覚えた。「作品」とか「私の仕事」と言いたいときに、今までなんて言えばいいのかわからず performanceと言っていて、でもour performanceは言うけどmy performanceはなんか変(私はperformしないから)と思っていたら、先生がproductionと言っていて、そっかー！と思いました。上演とか作品とか仕事とか、どういう関わり方から話をしたいか(立場や時系列など)で呼び名が変わると思うんだけど、そこらへんを日本語でもちゃんと認識したいと感じているようだ。

違うジャンルの人に「制作」と言うと、マネジメントじゃなくて作家などの領域だと思われることがあるけれど、舞台芸術の現場では職能がどういう風に分かれていて、それらがどういう流れで一緒に仕事をしているかを自覚する、を一旦経由できたら、集団にとって良いような気がする。

各領分の専門性をもっと適切に評価されるようになったら、特に俳優と制作の働く状況が改善されるんじゃないかと思う。ちゃんと仕事ができる俳優と制作が消耗していなくなったら、ほんのちょっとの時間差で、結局演出家も自分の仕事ができなくなる。

俳優と制作に限らず、どのセクションもそうだけど。最近ずっとこれを考えてる。どうしたらちゃんと集団創作ができるのか。

これは、作品のクレジットを英語で書く場合の記載の仕方についてRACで教わったことに刺激されて、考えたのだった。シルヴィ・ギエムの『ボレロ』の映像を見て感想を英語で言い合うワークがあったのだが、私は自分の意見を英語で言う練習よりも、ついでにざっと確認した作品クレジットのProduction managerやらTechnical directorやらという単語に、え? つまり日本語ではどのセクションのこと? 作品の何を担っている人ってことなの?? と引っ掛かった。

言葉があるということは、その言葉の指し示す事柄がきちんと認識されているということだ。英語圏の舞台芸術界では日本に比べて、productionに関わる仕事の内容や責任の範囲がずいぶん細かく決まっていて、意志決定の経路全体が体系立っているのだと驚いた。

例えば「制作者」とひと口に言っても、その仕事はプロデューサー、ディレクター、マネージャーと多岐にわたっているけれど、残念ながら制作の仕事の専門性が十分に理解されずにただの「雑用係」にされてしまっている現場も少なくない。仕事の内容に対する業界内の認識がきちんと発達していれば、その仕事の実質に対応した相応しい言葉が持たれるのではないかと。逆に言えば、言葉の粗さは認識の粗さの表れなのでは? それは専門性に対するリスペクトの欠如や業務のブラック化につながる。

日本の舞台芸術界の未分化なあいまいさについて、英語を経由して考えさせられた初日だった。

### 受講期間中のつぶやき

5/22

英会話の2回目。先生がGenreをジョンラと発音して、え、ジョンラ!? と思って思わずカタカナで書いた。今までに、「あなたはこういったジャンルの作品をつくっているの?」と質問されたことがあるはずだけど、毎回分かっていなかったということだ。

大学受験のときはそれなりに英語を勉強したけれど、黙読して意味を理解するのが大部分だったから、主に視覚経由で英語とつきあっていた。単語も目で覚えてた(〇〇系の話題で出てくるこんなニュアンスのmのやつ、とか)。英会話だと、発語する声の持つ情報量の多さにびっくりする。

紙に印刷された状態のもの的一对一で向き合って情報を得るという回路に、私は比較的慣れているみたい、と演劇の稽古をするようになって、思うようになった。それをもっと動的で広いものに、視覚メインからむしろ聴覚を使うものにシフトしていけたら、私も演出家になれるんじゃないか。

RACを受講していた時期はずっと、集団について考えていた。どうすればワンマンではなく、集団の個が一人ひとり自分の足で立ちながら一緒につくれるのか? また、果たして私は演出家と名乗っていいものなのかということも、迷っていた。

5/15

今日、AAF戯曲賞の募集のチラシをいただいた。今年から審査を、三浦基さん・羊屋白玉さん・篠田千明さん・鳴海康平さんという演出家4名が行うそうで、画期的だと思う。戯曲の価値が、

優れた上演の種になることだとしたら、演出家が戯曲を選ぶのは筋が通ったことだと思う。自分が作・演出というやり方をしておきながらなんだけど、本当は、劇作と演出を兼ねるのは無茶だと思っている。このやり方では、上演はつくれても、戯曲は生み出せないんじゃないかと思う(不可能じゃないかもしれないけど、ベストではない、無理のあるやり方だと思う)。戯曲(上演台本じゃなくて)をきちんと評価することで、劇作家というあり方が評価されるようにならないと、劇作家っていなくなってしまうんじゃないだろうか。それは長い目で見ると、演劇というメディアの豊かさが大きく失われることにつながると思う。

5/29

2012年の『すがれる』横浜版から出演してくれている武井さんが、鳥公園に入りました。鳥公園を始めて8年目の最近やっと、「集団」にちゃんと取り組みたいと思っています。急に何かが変わるわけではないですが、これからもよろしくお願いします。

## 最終プレゼン

6/29

「演出家」という立場名をやめて、ちょっとずつでいいから「置き物」とかにしていけたらいいなと思います。

7月15日の最終プレゼンでは、「デクノボーとしての自分のアーティスト性」について喋った。作品をつくることに憧れながらも、実際につくることをずっと恐れて遠巻きにきて法学部に入ってしまう、法律に一切興味を持たないことに焦って転部したこと。「何をどうつくる?」ではなくいつも「つくるとは何か?」「なぜ私がつくるのか? 作品をつかって生きるなんて生き方いいと、なぜ言えるのか?」を考えてしまうこと。私の創作現場は常に、中心にいるやつ(私)が一番デクノボーで真ん中にポカッと穴が空いているような状態で、でもあらゆる存在を否定しない作品をつくるためには、「何かが秀でているからここにいていい」のではなく、「何かできようが何もできなからうが、あるもんはあるし、いてしまってるものはいてしまってる」という姿勢に必然があると考えていること。

作品をつくり始めて今までずっと、迷い続けてぶれ続けている。やりたいことを一言パッと、肯定形で言えた試しがない。日本語で話すのでさえあっちへ行ったりこっちへ行ったり、道しるべのないまま本道と脇道も区別しないまま抽象的な散歩に連れ回すような喋り方をするものだから、多くの場合「なんか面白いような気はしたけど、結局何だったの?」ということになる。

そんな有り様なので、授業の中でクッキリとしたプレゼンテーションの構成に流し込んで活動を語ろうとする過程では、私の中に摩擦や葛藤がずいぶん起きた。

6/19

英会話6回目。英語を経由して自分の背景や作品、展望について話すことに快を感じるのは、もやもやと形になり切らない創作にまつわることを、対象化して構造化して把握できるからなの

かなと思う。英語だと語彙も少ないし、レッスンだから語るフォーマットも定められていて、もやもやがカットされる。

「自分のこういうバックグラウンドからこんな問題意識を持つようになり、私のインスピレーションの源は〇〇で、それを△△という方法でやっていて……」というのは、本当だけど、でも嘘だなあと思う。そのもっもらしい言葉の串は、後から刺した。だけど、言ってる自分でもそんな気になってくる。

「言葉にならないからこそ作品をつくってるんだから、説明なんてできません」というのがいいとは全く思わなくて、むしろちゃんと言葉を持ちたいと思ってここ数年やってきたけれど、言葉が先行してしまったら恐ろしい、という感覚がチョロリと芽生えている。

頭の良さと言葉の巧さだけで、その場で起こっていることや身体(存在)について鈍いままに進んでしまえるのは、やばいと思う(それは本当は、頭が良くないと思うが)。やばいと思うけど、あり得る。気を付けないと、言葉ばかり回るということが起こり得る、という想像ができる。想像できることは、条件がそろえばやれちゃうということじゃないかなと思うので、怖い。気を付けたい。

昨日の人との会話にあった、「西尾さんが少しずつだんだん黒ずんでも、」という言葉が、感触をもって大変残っていて、気付くと思い浮かべている。人間が黒ずむ、という言葉に、なんだか凄いいリアリティがあって、ショックを受けて小虫のような感覚になった。

言葉が大好きだけど同時に、「言葉ではなんとでも言える」といつも思う。上手いこと言ってのけてしまうことを恐れている。言葉は高みをつくって人を抑圧し得ると思うので。

でも私は、RAC受講後のアンケートに良かった点としてこんなことを書いた。

「作品について説明する際に話すべき項目・順序など、プレゼンテーションの一般的構成を学べた点。作品について話そうとするとどうしても主観的・抽象的な内容になり、とめどなく広がってしまいがちだが、自分のことや作品を知ってくれているわけではない人に伝えるためには、話したい内容を多少割り切って削ってでも、適切な型を採用して話すことが重要だと分かったので。」

話したい内容へのこだわりを捨てて適切な型を採用して話すことは、今もなかなか出来ていない。でも少なくとも、言いたいことの正確に言えなさばかり見過ぎてしまって「うう…」と言い淀んでいるより、多少ずれてたって話していくことで、開かれる窓があると分かった。

## たとえば、開かれた窓

じゃあ具体的に何が開かれたのかというと、例えばドイツのテアターフォルメンという演劇祭のフェローシップ・プログラムに呼んでいただいた(2016年6月)。RACが終わって3ヶ月後くらいの2015年10月に、セゾン文化財団のヴィジティング・フェローとしてテアターフォルメンのディレクターのマーティン・デネワルさんが来日・滞在されて、お会いしてお話したのだ。たしか私は、「いま私が興味を持っているのは空です」とかいうことを話したんだと思う。この世の全てが空



「テアターフォルメンのフェローのみんな。南アフリカから来たギャビンとリチャルドが不在で残念!!」



「ドイツでは難民受入賛成派と反対派がぶつかった」



「2018年のTPAMで2年ぶりにKang-heeと再会したところ」

だと分かれば人はもっと苦しまずにいられるんじゃないとか、人間の唯一性/代替可能性についてとかいうことを、まったく不完全な英語だったけれど一生懸命話した。

英語が話せることより、話せなくても話したいことがあるかどうかの方が大事なように思う。そしてそれは、話す相手が誰かにもよる。あのとき、マーティンさんが私の話に真剣に耳を傾けてくれていると感じた。だから出てきた言葉があった。そしてそれが伝わって、私を呼んでくれた。

正しくて十分な英会話なんてものは独立してあらかじめ存在するわけじゃなく、いつもその時々の人と人の間に生まれるものだと思う。その最初の一手を伸ばす練習をRACでできたことは、とても貴重な経験だった。

テアターフォルメンで出会った同じフェローの仲間との縁は今も続いていて、今年にはTPAMで韓国のチョン・カンヒと再会し、夏にはマレーシアでリー・レンシンと一緒にリサーチとクリエイションを行う予定だ。カンヒは、私が言いたいことを英語でなんと伝えればいいか探するときの「えーと」が懐かしい、それぞれ!と笑った。

私のイングリッシュはだいぶブロクンだけど、話せる。言葉を使って話すことは、同時に言葉からもれるもの、言葉になりきれないものたちを手渡すことでもある。



photo: 塚田史子

#### 西尾佳織 (にしお・かおり)

劇作家、演出家、鳥公園主宰。1985年東京生まれ。幼少期をマレーシアで過ごす。東京大学にて寺山修司を、東京藝術大学大学院にて太田省吾を研究。2007年に鳥公園を結成以降、全作品の脚本・演出を担当。「正しさ」から外れながらも確かに存在するものたちに、少しボケた角度から、柔らかな光を当てようと試みている。『カンロ』にて第58回岸田國士戯曲賞に、『ヨブ呼んでるよ』にて第62回岸田國士戯曲賞にノミネートされる。主な外部作品に、F/T14主催プログラム『透明な隣人〜8 エイト〜によせて〜』、SPACふじのくににせかい演劇祭2015『例えば朝9時には誰かルーム51の角を曲がってくるかを知っていたとする』など。2015年よりセゾン文化財団ジュニア・フェロー。

<https://www.bird-park.com/>